

【参考資料】コンサベーション・ネットワークで育む自然資本

住友林業グループは、2010年からインドネシアの西カリマンタン州で事業を行っており、2020年12月に WSL 社と MTI 社に挟まれた場所に位置している KMF 社が加わり、総面積 15 万 5 千ヘクタールの植林事業となりました。

事業地は、1960年代に始まった商業伐採によって、経済性の高い樹種は伐採し尽くされ、1990年に商業伐採権が切れたことで、違法伐採、焼畑が横行するようになり、手つかずの森林はごくわずかになっていました。

また、隣接する国の保全林は巨大な泥炭ドームであり、泥炭生態系を形成し、水源涵養機能を有しています。そして、一部に残された森林には稀少動物が生息していましたが、いずれの生息地も孤立していました。

泥炭生態系は自然資本の一つとして、その保護はとても重要な問題です。行政によって決められた植林事業のコンセッションの区画と生態系の境界は一致しません。私たちは、インドネシア政府や周辺の事業体に呼びかけ、ランドスケープレベルで環境保全を行う取り組みを進めています。これを、私たちはコンサベーション・ネットワークと呼び、国際的にも提唱しています。

このエリアには、オランウータン、テナガザルなどの陸上生物に加えて、カワゴンドウ等の希少な水棲動物も生息しています。コンサベーション・ネットワークにより、これら希少な生物を棲み処と移動のための回廊を設けています。

新たに加わった KMF 社は、この WSL 社と MTI 社を中心としたコンサベーション・ネットワークをより強固につなぐ役割を果たします。

熱帯雨林・泥炭地の役割は地球全体に及び、人口問題、エネルギー問題、気候変動、生物多様性、食料や水のセキュリティと、人類が自然と共生・共存するうえで、様々な課題と強い関連があります。私たち住友林業は、私たちが事業を行う森林や泥炭地を適切に管理し、そのエリアの自然資本としての価値を高めることで、これらのグローバルな課題の解決にむけてさらなる挑戦を続けます。

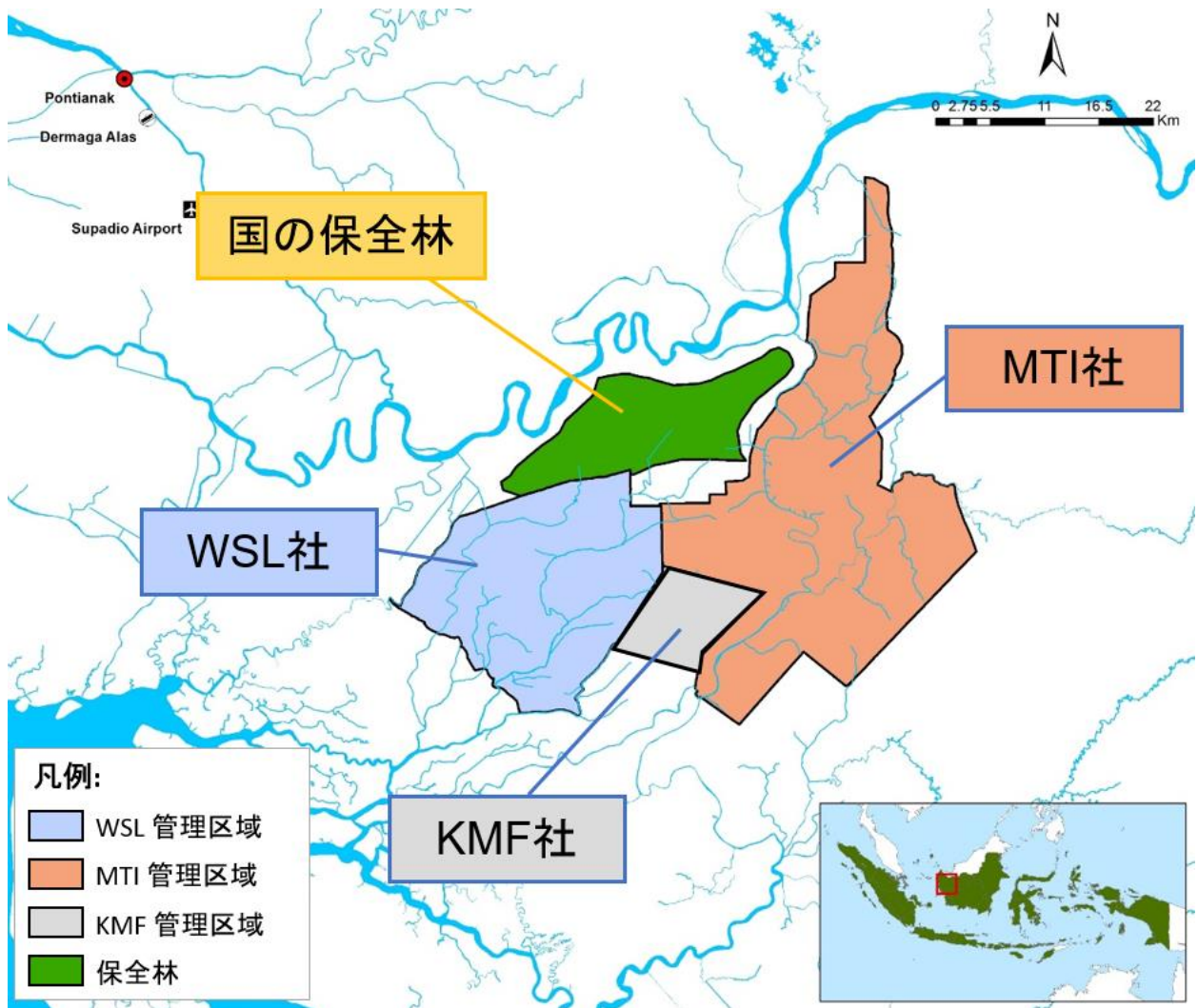


図1 WSL/MTI/KMF の管理区域

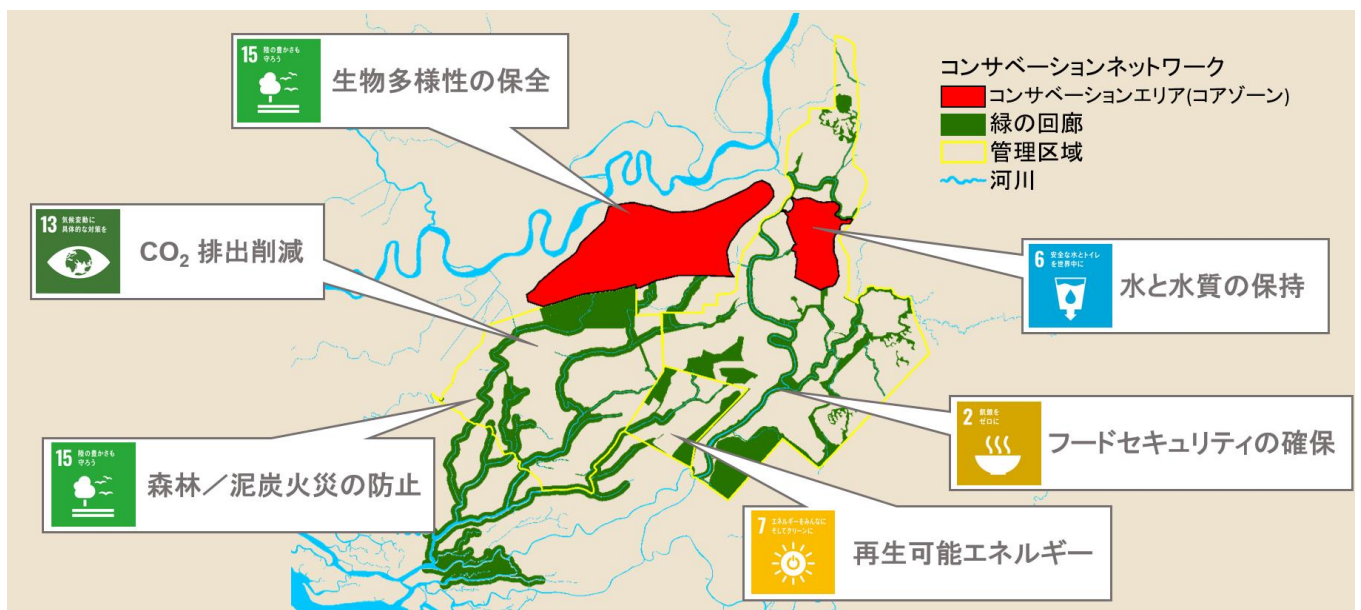


図2 コンサベーションネットワークによる SDGs と自然資本